様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ８ 月 ３０ 日現在

機関番号：２４４０３
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2014～2017
課題番号：２６６７０９２８

研究課題名（和文）臨床における看護継続教育担当者に対する家族看護教育提供モデルの導入と評価

研究課題名（英文）Introduction and evaluation of family nursing education providing model for continuing nursing education personnel at clinical site

研究代表者
中山　美由紀（Nakayama, Miyuki）

大阪府立大学・看護学研究科・教授

研究者番号：７０３２７４５１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、臨床現場における看護継続教育において、家族看護学教育を担う人材の育成を目的とした。臨床における家族看護教育の在り方や臨床看護師のニーズから家族看護教育内容を検討した。検討した家族看護教育プログラムを看護継続教育担当者に実施し、その効果を検証した。これらの結果から、クリニカルラダー2または3、家族看護初学者を対象とした家族看護学習のためのハンドブックの作成を行った。これらを用いて家族看護教育を今後実施できるように臨床に配布した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to train personnel who are responsible for family nursing education in continuing nursing education. We examined contents of family nursing education according to clinical ladder from the way of family nursing education in clinical practice and the needs of clinical nurses.We conducted a family nursing education program we studied for nursing continuation education personnel, and verified the effect. From these results, we have prepared a handbook for learning family nursing targeting clinical ladders 2 and 3. We distributed these to clinical use so that family nursing education could be implemented in the future.

研究分野：家族看護学

キーワード：家族看護　看護継続教育

１．研究開始当初の背景

家族は社会の最小単位として、健康な個人の成長・発達を促す基盤であると同時に、様々な疾患は家族性に発生し、その経過や予後も家族のもつ問題対処能力に依存することが多い。家族に看護を実施する場合、家族システムに働きかけることが有効であるといわれている。このように家族をシステムと捉え、患者を含む家族全体を 1 単位として考える家族看護学が日本に広まってきたのは、1990 年代後半からである。

日本における家族看護学研究者は海外の先駆者たちから家族看護理論を学び、我国の風土、文化に適した家族看護学の理論や介入方法のモデルの構築の必要性からいくつかの独自のモデルが開発してきた。日本における家族看護学の教育も約 20 年が経過したが、核家族化や小家族化など家族の多様化する中で、家族看護学の教育はますます必要とされてきている。

看護基礎教育において、家族看護学教育を目的とした科目が設置されているのは、28.7%、他の科目に含めて教育 47.7%、教育していない 23.6%であった（日本家族看護学会、2008）。このように、基礎教育において充分に家族看護を学習していない現状にある。平均在院期間が短縮傾向となり、今後在宅療養者が増加することも含め、家族を含めた看護がさらに重要となる。基礎教育で受講していない看護師に対して、看護継続教育において家族看護教育を系統立てて行うことが必要である。しかし、看護継続教育において、家族看護の教育を担当するものが少ないため、教育に組み込まれているとは限らない。このように臨床において家族看護の学習ニーズがあるにも関わらず、教育が実施されていない現実がある。

２．研究の目的

本研究は臨床現場における継続教育担当者を対象とする「家族看護教育提供モデル」の導入とプログラムの評価をすることを目的とする。そのために、研究期間内に以下のことを実施した。

１）臨床で実施されている継続教育の実態と家族看護教育担当者による教育内容の調査を実施し、提供する家族看護教育内容を検討する。

２）継続教育担当者を対象に１）で検討した家族看護教育を担う能力を養成するプログラムを実施し、その効果を検討する。

３）継続教育担当者が所属する機関において、教育に活用できる教材を開発する。

３．研究の方法

１）継続教育担当者に提供する家族看護教育内容の検討

（1）継続看護教育おいて家族支援専門看護師が認識している家族看護教育の内容と課題

研究参加者：日本看護協会に登録をしている家族支援専門看護師のうち研究参加の同意が得られたもの。

調査期間：平成 26 年 8 月～10 月

調査手順：日本看護協会に登録をしている家族支援専門看護師が所属している施設の看護部長に郵送にて研究協力の依頼と家族支援専門看護師に研究参加依頼書の配布を依頼した。研究参加の承諾が得られた家族支援専門看護師に対して，半構造化面接を行った。

調査内容：①臨床経験年数②家族支援専門看護師経験年数③実施している家族看護教育の内容④実施している家族看護教育上の工夫⑤教育を実施する上での課題

データ分析：面接内容はすべて録音し逐語録を作成し、内容分析を行った。

（2）継続教育における家族看護教育の現状と課題

対象：病床規模が 500 床以上の病院（全国 456 か所）の継続教育担当者　（各施設 1 名）

調査方法：無記名自記式質問紙

調査内容：施設の特徴、継続教育体制、家族看護教育の実施方法・対象者・内容、家族看護教育実施上の工夫と困難な点、家族看護教育を集団教育で実施することに関する考え

実施時期：平成 27 年 1 月～2 月

調査手順：質問紙を施設の看護部長に郵送にて継続教育担当者に配布を依頼し、調査に承諾をしたもののみ調査票を記入し、郵送にて返送する。

分析方法：記述統計および家族看護教育実施上の工夫と困難な点、家族看護教育を集団教育で実施することに関する考えの自由記述については内容分析を行った。

（1）～（2）の実施により教育プログラムの内容を検討する。

２）家族看護教育プログラムによる効果の検証

対象：家族看護教育プログラムに参加した臨床看護師（教育担当者）

データ収集：無記名自記式質問紙調査（郵送法）とし、家族看護教育プログラム開始前と終了後１か月時に収集した。

実施時期：平成 27 年 11 月～12 月

調査内容：①家族を含めた看護実践の頻度と②家族へのアセスメントの程度③家族看護の難しさの程度④看護実践内容（11 項目）の計 14 項目。

データ分析方法：①家族を含めた看護実践②家族へのアセスメントの程度③家族看護の難しさの程度について開始前と終了後１か月時の前後比較を対応のある t 検定を用いて分析した。

３）継続教育担当者が所属する機関において、教育に活用できる教材の開発

（1）臨床看護師の家族看護教育に対するニーズ調査

対象：家族看護フォーラムに参加した臨床看護師

実施時期：平成 28 年 9 月

調査方法：無記名自記式質問紙
調査内容：家族看護学の教育経験の有無、家族に関する情報収集の頻度、家族へのアセスメントの程度、家族看護アセスメントの困難感、家族看護実践の頻度、家族との付き合い方、家族看護の理解度、家族看護に関するニーズなど、とした。
データ分析：記述統計および家族看護教育経験の有無別に比較検討した。
２）の教育プログラムの成果と臨床看護師の家族看護教育に対するニーズ調査の結果より教育に活用する教材を開発した。

４．研究成果

１）継続教育担当者に提供する家族看護教育内容の検討

（1）継続看護教育おいて家族支援専門看護師が認識している家族看護教育の内容と課題

継続教育において家族支援専門看護師が実施している家族看護教育の内容と課題を明らかにすることを目的に、14 名（男性 4 名，女性 10 名）の家族支援専門看護師に対してインタビューを行った。参加者の臨床経験年数は平均 16.1±4.9 年（9～24 年）、家族支援専門看護師の経験年数は平均 2.8 ± 1.6 年（1～6 年）であった。家族看護教育の実施内容は、「家族とは」「家族の病気体験」「家族とのコミュニケーション」「家族看護アセスメント・計画立案」等であった。教育上の工夫は、【スタッフのニーズや困難に応える】【スタッフとの関係を形成する】【家族看護の理解を促すように継続教育の方法を検討する】【継続的にスタッフを支援する】の 4 カテゴリが抽出された。また、教育上の課題は、【家族に意識が向かない】【家族看護の難しさから関わりができない】【家族看護の教育のシステムが充分でない】【専門看護師として組織的に活動することに制限がある】の 4 カテゴリであった。家族支援専門看護師が実施している教育内容を参考にし、家族看護教育を継続教育において系統立てて実施することが必要である。

（2）継続教育における家族看護教育の現状と課題

継続教育における家族看護教育の現状と課題を明らかにすることを目的とし、病床規模が 500 床以上ある 456 施設の継続教育担当者を対象に、家族看護教育の実施方法・対象者・内容、家族看護教育に対する考えなどについて調査を実施し、141 施設（回収率 33.3%）から協力が得られた。家族看護教育を実施している施設は 32 施設であった。家族看護教育受講対象者をクリニカルラダーに設定した対象者としている施設は 22 施設であった。対象となるレベルはクリニカルラダーの 2 又は 3 が多かったが(複数回答含む)、2 施設はレベル 1 も対象としていた。設定していない場合は経験年数による設定や希望するものとしていた。教育の内容として、「家族とは」「家族看護とは」「家族看護アセスメント・介入モデル」「家族とのコミュニケーション技術」を実施していた。家族看護教育で工夫している点があると回答したものは 15 名であった。得られた自由記述から 31 のデータが抽出され、9 カテゴリに分類された。カテゴリは【身近な事例を活用した講義・演習を行う】【理論やモデルの紹介】【専門看護師の実践事例の紹介】【ロールプレイを活用し、家族の心理を理解する】【家族看護の視点について教授する】【対応困難事例における家族支援を教授する】【地域に拡大した家族看護教育を行う】【基礎レベルから家族看護教育を行う】【対象者のニーズを検討し実施する】であった。家族看護教育において困難な点があると回答したものは 16 名で、得られた自由記述から 20 データが抽出され、6 カテゴリに分類された。カテゴリは【受講者が少ない】【家族看護の基本的な考えと実践を結び付けることの難しさ】【集合教育における限界】【受講者の設定するのが難しい】【研修時間に割り当てる時間数の確保が難しい】【適任の講師の配置が難しい】であった。家族看護教育を集団教育で実施することに関する考えでは、【実施していない理由】【重要と考える背景】【今後の取り組みと課題】の 3 カテゴリに分類された。継続教育において家族看護教育の実施はまだまだ少ない現状が明らかになった。基礎教育において家族看護学を受講していない看護師に対して、継続教育において家族看護教育を系統立てて行うことが今後必要である。
(1)（2）の結果より検討した教育プログラムの内容を以下に示す。

	内容
第 1 回	オリエンテーション
	家族看護の諸理論
	家族看護アセスメント/介入モデル
第 2 回	家族の病気体験
	家族看護アセスメント
	家族像の形成
第 3 回	家族看護介入方法
	家族の意思決定支援
	家族看護計画立案
	家族看護介入の実際：ロールプレイ

２）家族看護教育プログラムによる効果の検討

家族看護教育プログラムに参加した 45 名を対象に、プログラム前と終了後 1 か月の家族看護の実践と認識の変化を調査した。参加者の平均臨床経験数は 15.1 年であった。所属は、ICU・外科系が多く、次いで内科系、回復期リハビリテーション病棟であった。プログラム前後を比較した結果、家族看護実践においては、「患者の治療や看護に関して家族に十分説明している」「家族の言動や表情の変化に気づくことができる」がプログラム

後のほうが実践の頻度が多くみられた。また、教育プログラムの内容に関しては、ほぼ全員が十分に満足しているとの回答していた。特に家族看護介入の満足度の評価は高く、事例のロールプレイ時に患者・家族役を体験することで、患者とその家族の「気持ちのゆれ、言動についてすごく分かりやすく得られた」との感想にあるように、患者とその家族の気持ちを理解することにつながり、以前よりも患者とその家族の言動や表情の変化に注意深くなり、理解を確認しながら説明を行うようになったことが考えられる。教育を担当するものに効果がみられた介入の実際は、臨床においても身近な事例を用いたケースワークにより効果をみられると考えられる。

３）継続教育担当者が所属する機関において、教育に活用できる教材の開発

臨床看護師146名の家族看護教育に関するニーズを調査した。参加者の看護師平均経験年数は 15.3 年（2 年目から 31 年目）であった。基礎教育における家族看護教育経験有り 46 名、なし 94 名であり、家族看護研修の参加経験有り 23 名、なし 96 名であった。家族看護教育経験の有無別に比較した結果、家族の情報収集や家族との援助関係の形成において差がみられた。また、学習ニーズとして、①家族看護の基本姿勢 47 名②家族とのコミュニケーション 65 名③家族との援助関係の形成 52 名④家族看護に関する理論・モデル 38 名⑤家族看護アセスメントモデル 49 名⑥家族看護介入モデル 53 名⑦家族看護過程 41 名⑧家族看護介入技術 69 名という結果であった。

これらから、教育に活用する教材として、クリニカルラダーの 2 又は 3、家族看護初学者を対象と考え、「はじめてみよう！家族看護」を作成した。

具体的な内容は、STEP1「家族ってなんだろう」、STEP2「家族を看護するための基本姿勢を学ぼう」、STEP3「家族看護の実践に役立つ理論を知ろう」、STEP4「家族の全体像をとらえよう」である。

これらを用いて家族看護教育を今後実施できるように臨床に配布した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２　件）

① 中山美由紀、岡本双美子、継続看護教育において家族支援専門看護師が認識している家族看護教育の内容と課題継、大阪府立大学看護学雑誌、23（1）、2017、31-37. 査読有
http://hdl.handle.net/10466/15229

② 中山美由紀、岡本双美子、継続教育における家族看護教育の現状と課題、大阪府立大学看護学雑誌、22（1）、2016、45-53. 査読有
http://hdl.handle.net/10466/14848

〔学会発表〕（計　１０　件）

① 岡本双美子、中山美由紀、臨床看護師の家族看護教育のニーズと家族看護アセスメントに関する困難、日本家族看護学会第 24 回学術集会、2017. 千葉

② Aya Yamauchi, Fumiko Okamoto, Miyuki Nakayama. A survey of family nursing practice in Japan: comparing educational experiences, 13th International Family Nursing Conference, 2017, Spain.

③ Fumiko Okamoto, Miyuki Nakayama. Effect of a Family Nursing Seminar for Nurses; A 3-year Before-After Comparison study, 13th International Family Nursing Conference, 2017, Spain.

④ 岡本双美子、中山美由紀. 家族看護研修会に参加した看護師の家族看護に関する実践の変化、日本家族看護学会第 23 回学術集会、2016、山形.

⑤ 岡本双美子、中山美由紀、臨床において家族支援専門看護師が実施している家族看護教育の工夫とその課題日本家族看護学会第 22 回学術集会、2015、小田原.

⑥ Fumiko Okamoto, Miyuki Nakayama, Content of Family Nursing in Continuing Education by Certified Nurse Specialists, 12th International Family Nursing Conference, 2015, Odense.

⑦ Fumiko Okamoto, Miyuki Nakayama, Aya Yamauchi. Effect of a Family Nursing Seminar for Nurse with Differing Years of Clinical Experience, 19th EAFONS, 2015, Taiwan.

⑧ 井上敦子、岡本双美子、中山美由紀、家族看護に関する看護実践の変化－家族看護講座前後の内容分析の比較－、第 34 回日本看護科学学会学術集会、2014、名古屋

⑨ 岡本双美子、中山美由紀、家族看護に関する看護師の認識の変化、日本家族看護学会第 21 回学術集会、2014、岡山.

⑩ Fumiko Okamoto, Miyuki Nakayama, Atsuko Inoue, Mayumi Fujiwara, Natsumi Tawa, Momoko Asai, Aya Yamauchi, The Nurse's Perceptions about Families and the Value of Family Nursing Practice: Detective analysis of Open-end Answers from Participants of a Family Nursing, 35th International Association for Human Caring, 2014, Japan.

〔図書〕（計　１　件）

① 中山美由紀、藤野崇編著、阿川勇太、浅井桃子、井上敦子、清水なつ美、永野晶子、藤原真弓、米田愛、山口望、大阪公立大学出版会、はじめてみよう！家族看護、2018、総ページ数 59.

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
中山　美由紀（NAKAYAMA　Miyuki）
大阪府立大学・看護学部・教授
研究者番号：７０３２７４５１

(2)研究分担者
岡本　双美子（OKAMOTO　Fumiko）
大阪府立大学・看護学部・准教授
研究者番号：４０３４２２３２

藤野　崇（FUJINO　Takashi）
近畿大学医学部附属病院・看護部・主任
研究者番号：５０７５８４０６

(2)研究協力者
井上　敦子　（INOUE　Atsuko）
山内　文　　（YAMAUCHI　Aya）